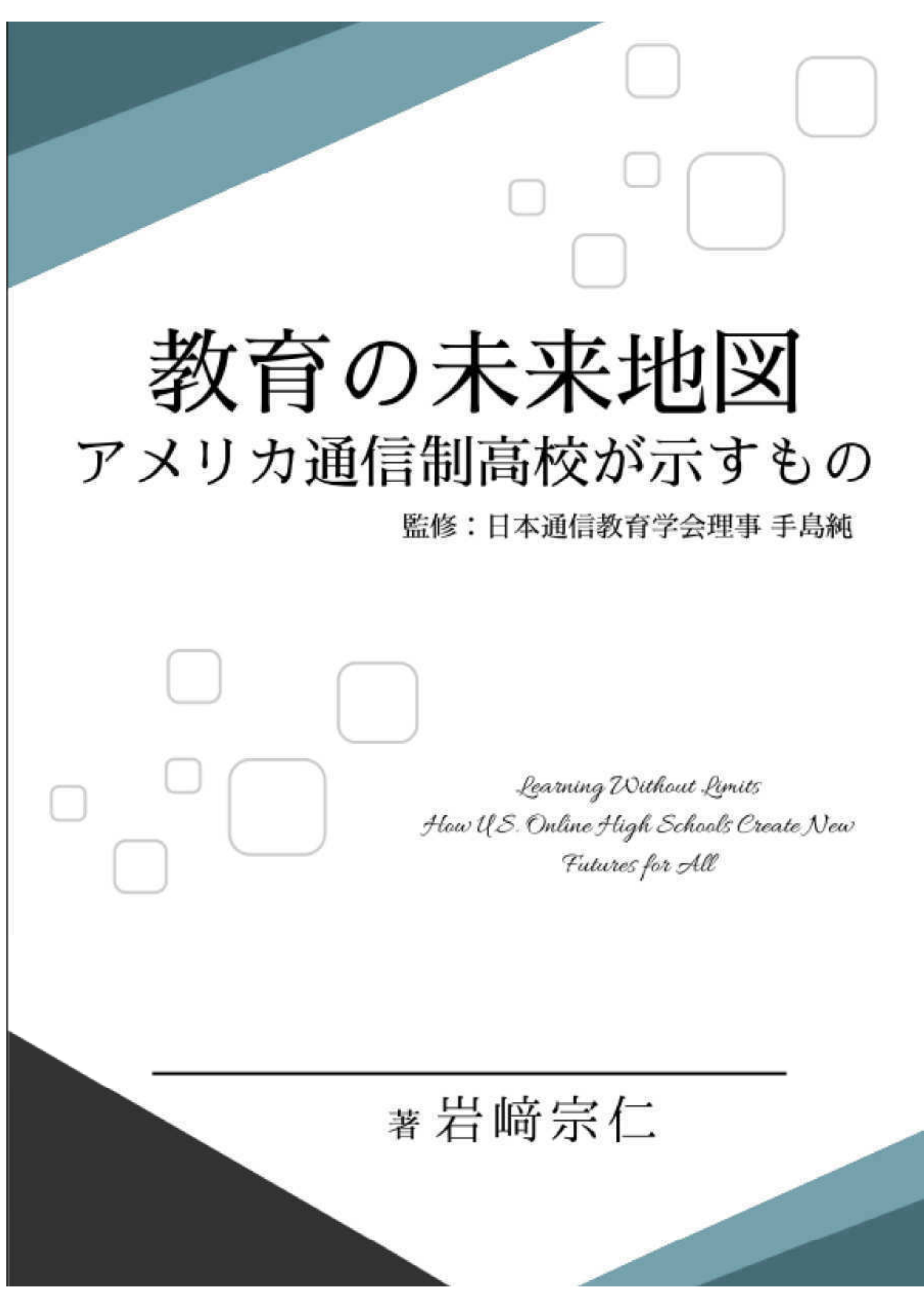




教育の未来地図

アメリカ通信制高校が示すもの

監修：日本通信教育学会理事 手島純

*Learning Without Limits
How U.S. Online High Schools Create New
Futures for All*

著 岩崎宗仁



教育の未来地図

アメリカ通信制高校が示すもの

本書は、アメリカの通信制高校で学び、高校卒業資格を得られる新しい教育の形を紹介する。インターネット環境さえあれば、世界中どこにいても受講が可能だ。スポーツや芸能活動を続ける人、海外を旅する人、不登校や病気療養中の人など、さまざまな状況にある若者が、自分のペースで学びを進められる。その柔軟性は、従来の学校教育の枠を越え、「学びは場所や時間に縛られない」という未来の可能性を示す。

教育の未来地図
～アメリカ通信制高校が示すもの～

お試し版

「はじめに」 「第1章」 「第2章」 「第4章」 「第7章」
「エピローグ」 「おわりに」 を、ご覧いただけます。

ご関心をお寄せいただけましたら、
ぜひ本書をお手に取ってお読みください。

― 表記の統一について ―

本書では、米国通信制高校 Penn Foster High School を取り上げています。

縦書き本文中では読みやすさを優先し、名称を「ペンフォスター高校」と表記します。なお、初出時のみ正式名称 (Penn Foster High School) を併記しました。

以降はすべて「ペンフォスター高校」と記載していますが、いずれも同一の学校を指しています。

はじめに 制度の外に、もうひとつの「高校」を

日本の教育制度は、依然として「通学」を前提とした画一的な枠組みの中にある。義務教育を終えたあと、全日制・定時制・通信制高校という選択肢はあるものの、その多くは「年齢」や「在籍期間」など、制度的な制限に左右されている。不登校、病気、海外在住、家庭の事情——学校に通えない理由は多様化しているにもかかわらず、制度の柔軟性は十分とは言えない。その結果、「高校卒業」のハードルが思いのほか高いものとなり、学び直しの機会を持てない若者たちが少なくない。

私が教育の道に進むきっかけとなったのは、学生時代のバックパッカーとしての旅だった。アジア、アフリカ、中南米の国々を歩き、教育の機会すら与えられない子どもたちと出会った。そのとき感じたのは、「教育を受けられない」という事実が、その人の未来をどれほど制限してしまうのか、という重さだった。一方で、ほんのわずかな学びの機会が、その人の人生をどれだけ大きく変えうるのかも、同時に実感した。そして、もっと深く心に残ったのは、教育の欠如が生む差別、紛争、そして経済格差の現実だった。教育がなければ、自分の意見を持つことも、社会の不条理に声を上げることもし難くなる。私は、世界を旅して見た理不尽の前に、「教育こそが社会を変える力だ」と確信した。そして、教育が「権利」ではなく「特権」となってしまうている社会を、「変えたい」と願い、2001年に教育団体「AJ」を立ち上げたのだ¹。

あれから四半世紀、日本でもさまざまな事情を抱える子どもたちと向き合いながら、「一人も取り残されない教育」をつくることを自らの使命としてきた。そうしたなかで出会ったのが、アメリカのオン

ライン制高校「ペンフォスター高校 (Penn Foster High School)」である。

1890年に創設されたこの学校は、Cognia (旧 Advanced) という全米最大級の認定機関から正式認証を受け、完全オンラインで高校卒業資格を取得できる仕組みを提供している。現在私が運営するAJインターナショナルアカデミーは、このペンフォスター高校の日本事務局を担っている。

ペンフォスターの最大の特徴は、「年齢不問」「単位制」「学年制なし」「再受講可能」「完全オンライン」という、制度のしほりを抜けた自由な設計にある。すでに日本国内でも、多様な背景をもつ若者たちがこの制度を活用し、高卒資格を取得して大学進学や就労へと進んでいる。この本では、ペンフォスターという教育モデルが日本の教育現場に何をもたらさうかを、多角的に紹介する。そしてこれは、AJインターナショナルアカデミーだけの取り組みにとどまらない。私たちはこの仕組みを、全国のフリースクール、特別支援団体などと共有し、誰もがアクセスできる形で拡大していくことを目指している。制度の外側から風穴をあける教育モデルは、いまや補助的な選択肢ではなく、「もうひとつの本流」となり得る。学ぶ場所を選べない、時間に制限のある、何らかの壁にぶつかっている若者たちにとって、このもうひとつの高校は、確かな希望と選択肢を示している。この本が、教育に関わるすべての人にとって、「学びとは何か」「制度とは誰のためにあるのか」を問い直す契機となることを、心から願っている。

【注】

1 設立当初は「AIE JAPAN」のちに「AJ」と改名。

岩崎宗仁

目次

はじめに	制度の外に、もうひとつの「高校」を.....	4
第1章 ペンフォスターとは何か？.....		11
130年の歴史が生んだ「もうひとつの高校」.....		12
Cognia 認定校が示す「もうひとつの卒業資格」.....		13
「日本で学ぶ」という選択肢.....		16
「年齢・学年・場所」を超える学び.....		18
保護者や支援者が担う役割.....		21

第2章 誰もが学び直せる社会に向けて.....	25
なぜ、いま「もう一つの高校」が必要なのか？.....	26
「学び直し」が困難な日本の教育制度.....	29
多様な学習者が求める「場所に縛られない学び」.....	31
第3章 学ぶ個人が主語になる時代へ.....	38
日本における「個別最適な学び」への関心.....	39
オンライン高校に対する若者の意識変化.....	41
ペンフォスターが示す「もうひとつの高校」の意義.....	43
学びの自由がもたらす人生の再構築.....	46

第4章	学びの現場から――生徒・保護者の声……………	50
	生徒の声…不登校から進学へ／海外からの受講／社会人の学び直し……………	51
	保護者の声…子どもの変化と家庭でのサポート体験……………	54
	メッセージ…卒業生からこれからの受講生へ……………	56
第5章	日本の教育と世界標準のギャップ……………	62
	学年Ⅱ年齢という常識の見直し……………	63
	評価・出席・試験…何のためにあるのか？……………	65
	日本の制度とグローバルな教育の違い……………	67
	「制度の内側」と「制度の外側」からの教育改革……………	70

第6章 誰一人取り残さない教育のかたち	74
不登校支援・学び直しの現場から	75
多様な生徒を支える教育設計とは	77
包摂的教育 (inclusive education) とその実現に向けて	80
フリースクールとの連携による実践	83
第7章 声を聴くーペンフォスター高校 早期卒業体験記	87
上間琉乙心さんー15歳で大学へ	88
上間さんから、後輩へのメッセージ	90
第8章 トンガで育ち、日本で挑むー横山シシファ美麗さんの教育地図	94

特別章	
ペンフォスターの教室を開いてみると.....	101

エピソード	
ギャッププレイヤーから始まる「生きる学び」.....	114

おわりに.....	121
-----------	-----

第1章 ペンフォスターとは何か？

130年の歴史が生んだ「もうひとつの高校」

ペンフォスター高校は、アメリカ・ペンシルベニア州に本部を置くオンライン制の高等学校であり、1890年の創立以来、130年以上の歴史を有している。当初は鉱山労働者の夜間学習支援を目的とした通信教育から始まり、時代の変遷とともに郵送、テレビ講座、そして現在のインターネットを活用したオンライン学習へと発展を遂げてきた。

現在、年間6万人を超える生徒が在籍しており、学習の柔軟性および多様な進路選択肢への対応力が評価されている。高校卒業資格の取得を目的としたプログラムに加え、大学進学やキャリア形成に向けた科目群も提供しており、包括的な教育支援体制を整えている。

運営母体であるペンフォスターグループは、職業訓練校や成人教育機関も運営しており、「生涯学習」を理念に掲げる教育プラットフォームを築いている点が特筆される。学習スタイルの柔軟性に加え、同校は米国最大級の教育認定機関であるCogniaの認証を受けており、同校が発行する高校卒業資格は全米において広く認知されている¹。

また、学費が比較的安価に設定されている点も、教育へのアクセスを拡大するという理念に合致している。さらに同校は、アメリカ国内にとどまらず、世界中の生徒を対象に受け入れを行っている。たとえば、親の海外勤務に同行して現地に滞在している日本人家庭の子どもや、国内でフリースクールに通う生徒、不登校経験のある若者たちなど、従来の学校制度では対応が難しかった層に対しても、個別の事情に応じた学びの機会を提供している。

このようにペンフォスター高校は、単なる「オンラインの選択肢」とどまらず、「既存の制度で支えきれなかった学び」を再び社会につなぎ直すインフラとして、今日的意義を持つ存在である。

【著者の目】

この学校のことを知って私が一番最初に感じたのは、「こんな形の学びが、もっと早く知れていたら」ということでした。教室に行けなかった日。進路をあきらめかけた瞬間。そんなときに、自分のペースで学び直せる場所がある。それだけで、どれだけ救われる子どもたちがいるだろうか。

ペンフォスターは、単に「オンラインの学校」ではありません。一人ひとりの状況やリズムに寄り添いながら、「あなたの学びを、あなたの形で」支えてくれる、もうひとつの希望なのだとは私は思います。

【注】

- 1 Cognia は、旧 Advanced を前身とする米国の大手教育認定機関であり、全米50州および70か国以上の教育機関を認証対象とする。

Cognia 認定校が示す 「もうひとつの卒業資格」

「アメリカの通信制高校卒業資格を持っていれば、日本の大学を受験できる」。この制度的事実、必ずしも広く知られているとはいえない。

前述の通り、ペンフォスター高校は、米国において最も広範な認証実績を持つ非営利教育認定機関であるCognia¹の認証を受けた正規高校である。

このような国際的評価制度は、日本の大学入試制度にも接続されている。文部科学省が定める「大学入学資格」の範囲には、「国際的な評価団体（WASC、CIS、ACSI、NEASC、Cognia、COBIS）の認定を受けた教育施設の12年の課程を修了した者」が明記されており³、実際にペンフォスター卒業生が「大学入学共通テスト」を経て、国内大学へ進学した事例は多数存在する。

ペンフォスター高校の卒業証書は単に「アメリカの高校卒業資格」であるにとどまらず、日本においても一定の法的・制度的効力を持つ。しかし、より注目すべきは、その資格が持つ形式的側面以上に、教育機会の「再設計」を可能にする制度的柔軟性にある。年齢、在籍形態、居住地などの制約を超えて、個別最適な進路設計を支援する構造は、従来の「学年進行型・同調型」の制度枠組みに対する実践的オルタナティブとして機能しうる。実際に、次のような事例が報告されている。

- 日本の中学校卒業後、アメリカ式カリキュラムを用いて16歳で高校課程を修了し、大学進学を果たした生徒
- 高校中退後、数年間の就労を経て、20代で再入学し、高卒資格取得と大学進学を達成した社会人
- 通常の学校に通えなかった中学生が、フリースクール在籍と並行しながら、オンラインで段階的に単位を取得している例

これらの事例が示すのは、「高校卒業」という「成果」ではなく、「何歳でも・どこからでも・何度でも学び直せる」という「仕組み」そのものの意義である。ペンフォスターが提供するのは、単線型進学ルートの代替ではなく、「教育のセカンドチャンス」を制度として埋め込んだ「包摂的構造」である。そしてその構造を、日本国内の大学制度や学習支援機関といかに接続するかが、今後の実装的課題である。

【著者の目】

『今』の自分に合った学び方を選べる時代へ」私はこれまで、さまざまな理由で学校に通えなかった子どもたちと向き合ってきました。

病気や家庭の事情、不登校、海外生活……背景は違っても、共通していたのは「学びたい」という思いでした。

一方で、こんな子どもたちにも出会っています。

プロを目指してスポーツに打ち込む子、海外の大学に早く進学したいと願う子、自分の夢に向かって働きながら学ぶ子——彼らもまた、「もっと自分に合った学び方があったなら」と感じていたのです。学校に「行けない」子も、「行かない」という選択をした子も、そして「行きながら別の学びを求める」子も、誰ひとり取り残さない。

今の時代には、場所や時間に縛られず、自分のペースで学びを積み重ねられる環境が必要です。

「ここからでも、ここだからこそ、未来につながる」そう実感できる仕組みを届けたい——私はそう願

っています。

【注】

- 1 Cogna公式サイト "About Us" (<https://www.cogna.org/about/>) より。旧 AdvancED を前身とする。
- 2 Arredondo, D. E., & Rucinski, T. T. (2022). *International Accreditation Systems and Education Quality Assurance*. Journal of Comparative Policy.
- 3 文部科学省「大学入学資格について（2025年度版）」より。 <https://www.mext.go.jp/>

【補足】

※ペンフォスター高校の卒業資格は、Cogna 認定により多くの米国大学・一部の海外大学で入学要件として受理されています。進学可否は各大学の審査基準によるため、個別確認が必要です。

「日本で学ぶ」という選択肢

「アメリカの高校に通わなくても、アメリカの高校卒業資格は取得できる」——
この文言は、制度を十分に理解していない者にとって、誤解を招く可能性もある。しかし、この記述は事実に基づく制度的説明である。

ペンフォスター高校は、完全オンライン型の教育モデルを採用しており、米国内での通学や居住を一

切要しない¹。必要な要件は、安定したインターネット接続環境と、自律的に学習を継続しようとする意思のみである。全課程は、教材の閲覧、課題の提出、試験の受験に至るまで、オンラインで完結する仕組みで設計されており、物理的な通学概念を制度的に排除している²。

この教育構造は、日本国内に在住する生徒のみならず、海外に居住する日本人家庭の子どもたちにも有効な教育選択肢を提供している。たとえば、保護者の海外赴任に伴い、インターナショナルスクールや現地校に通学しているが、日本の高校制度との接続に不安を抱える事例は少なくない。そうした子どもたちにとって、ペンフォスターのように「グローバルに認知される卒業資格」を、滞在先にかかわらず取得できる仕組みは、「制度的孤立」を防ぐライフラインとして機能する。

実際、アジア、中東、ヨーロッパ等に在住しながらペンフォスターで学び、卒業後に日本、米国、カナダ、オーストラリアの大学へ進学した生徒の実例が複数存在する³。

さらに日本国内においても、こうした「地理的制約を超える教育機会」の確保は、今後ますます重要性を増していく。都市圏外に居住する生徒、とりわけ離島や中山間地域などに暮らす子どもたちにとって、オンライン教育は「教育アクセスの平等化」を担保する重要な手段となる³。

このように、ペンフォスターが提供する教育モデルは、「国境を越えて学ぶ」だけでなく、「場所に縛られずに学ぶ」ことを制度的に可能にする。これは、単なる教育の手段ではなく、「地理に依存しない学び」の象徴であり、情報通信技術（ICT）時代における新たな教育モデルの一端を示している。

【著者の目】

学びは、他人と比べるものではない。どんなに遠回りしても、自分の歩幅で進めばいい。

始めるのが遅くても、やめなければ、それは「学び続けている」ということなのだ。制度に縛られず、「今の自分」から出発できる仕組みが大切。

そんな学びのかたちが、もっと広がってほしいと、心から願っています。

【注】

- 1 ペンフォスター高校: *High School Catalog: 2025*.
- 2 AJインターナショナルアカデミー進路実績データ（非公開資料）。
- 3 文部科学省「通信教育の現状と展望」（2023年）。<https://www.mext.go.jp/>

「年齢・学年・場所」を超える学び

日本の教育制度においては、「年齢＝学年」という直線的な時間軸が依然として強く機能している。すなわち、15歳で高校1年、16歳で高校2年、17歳で高校3年というモデルが前提化され、その枠組みから逸脱する学習者に対しては、「特別な支援が必要」「進度が遅れている」などのラベリングが行われ¹る傾向が根強い¹。

これに対し、ペンフォスター高校は、入学要件に年齢的上限や学年の進度を設けていない。米国8年生（グレード8）、つまり日本の中学2年課程修了相当であれば、年齢にかかわらず誰でも入学可能であり、学習ペースも完全に自己管理に委ねられている²。

この制度により、実際に中学3年相当から学習を開始し、15歳で高校課程を修了して、中学3年生で日本の共通テストに挑み大学進学を果たした事例がある。一方で、不登校を経て20代から学び直しを始め、3年かけて全課程を修了したのちに専門学校へ進学した例も報告されている³。こうした「多様な時間軸」を包摂できる柔軟な制度設計は、ペンフォスターの特筆すべき特徴である。

さらに注目すべきは、「学びの場所」に関する制約の排除である。前章で述べた通り、ペンフォスターの教育は完全オンライン制を採っており、居住地に関係なく世界中からアクセス可能である。学習の場は、自宅に限らず、図書館、カフェ、病室、海外居住地など、学習者のライフスタイルや状況に応じて柔軟に設定できる。

このような仕組みは、不登校、ひきこもり、経済的困難、海外移住、社会的孤立といった多様な背景を抱える学習者に対して、「制度に組み込まれることなく、制度の外からも学びにアクセスできる道」を提示している。これは、従来の一斉教育モデルでは到達できなかった教育包摂（educational inclusion）の実現に向けた重要なアプローチであり、単なる補完的選択肢にとどまらない教育的価値を有する。

年齢に縛られず、
学年にとらわれず、

場所に制限されない。

こうした教育のあり方は、制度の枠外にいた人々に新たな学習権を保障するものであり、教育制度における包摂と回復の可能性を示している。

【著者の目】

「未来を『待つ』のではなく、『つかみ』に行く」

この学校に集まってくるのは、早く大学で学びたい、世界で活躍したい、夢と勉強のどちらも諦めたくない生徒たちです。そんなまっすぐな思いを抱いて、扉を叩く子どもたちも多いです。スポーツで世界を目指す生徒もいれば、芸能活動や仕事と両立する生徒もいます。

二つの高校に在籍して、アメリカと日本、二つの卒業資格を手にしようと努力する子もいます。

「もっと自由に学びたい」「もっと早く進みたい」その願いが、ここでは叶うのです。ペンフォスターが照らしているのは、「再出発の光」だけではありません。挑戦するすべての子にとっての、「もうひとつの進路」の道標でもあるのです。

【注】

1 文部科学省「学年制度の課題と展望」（2022年）。<https://www.mext.go.jp/>

2 ペンフォスター高校: *High School Catalog*. 2025

保護者や支援者が担う役割

完全オンライン・自律進行型の学習を特長とするペンフォスター高校の教育は、その柔軟性ゆえに、学習者本人の「意思」と「自己管理能力」に大きく依拠している。一方で、学習環境の整備や心理的サポートといった「外的支援」の存在も、学びの持続性において決定的な要素となる。

特に日本においては、「通信制高校」や「フリースクール」といった制度外1の教育選択は、依然として主流の進路から外れた「例外的進路」と捉えられる傾向が根強い。その中で、保護者が「既存の制度に収まらない選択肢」を信頼し、子どもに託すという決断は、極めて大きな心理的・社会的意味をもつ。

ある保護者の証言は、この選択の重さと、それを乗り越えた先にある変化を物語っている。「娘が学校に行けなくなったとき、親として何が正解か分かりませんでした。でも、本人がペンフォスターの存在を知り、『やってみたい』と言ったとき、思い切って背中を押しました。最初の一步は不安でしたが、今では本当にあの時、信じてよかったと思います」

さらに、A Jインターネットナショナルアカデミーのような支援団体は、学習者本人だけでなく、家庭に寄り添う形で進捗管理・質疑応答・進学相談・生活リズムの調整といった多層的な支援を提供している。

こうした第三者の伴走支援は、「家庭が唯一の支援基盤」という孤立状態を解消し、学びを社会的に支える仕組みとして機能している。

また、学校やフリースクールの教員・スタッフにとっても、ペンフォスターのような教育機関は、「制度からはずれた子どもたち」に別のルートを提示する「リカバリーツール」としての意義を持つ。制度の硬直性の中で埋もれかけた学びの芽が、別の土壌で再び成長する光景は、既に各地で確認されている。教育とは、制度によって完結するものではない。学ぶのは本人だとしても、学びを支える基盤は、家庭・地域・支援者など、多様な「見えない力」の協働によって構築される。その連携の中にこそ、真に柔軟で持続可能な教育のかたちが見出されるのである。

【著者の目】

完全オンラインの学びは、子ども一人の力だけで成り立つものではありません。たしかに、学ぶ本人の意志や自律性は出発点になりますが、それだけでは継続は難しいのが現実です。

実際に、私たちが関わってきた多くの生徒は、家庭や支援者による見守りや励ましによって、学びを続けることができます。

特に、学校という場から離れた経験を持つ生徒にとっては、「この子の選択を信じる」という周囲の覚悟が、何よりも大きな支えになります。私は、教育の現場で何度も、「信じて待つ」ことの力を目の当たりにしてきました。子どもが自分で歩き出すためには、安心できる環境と、失敗してもやり直せる余地

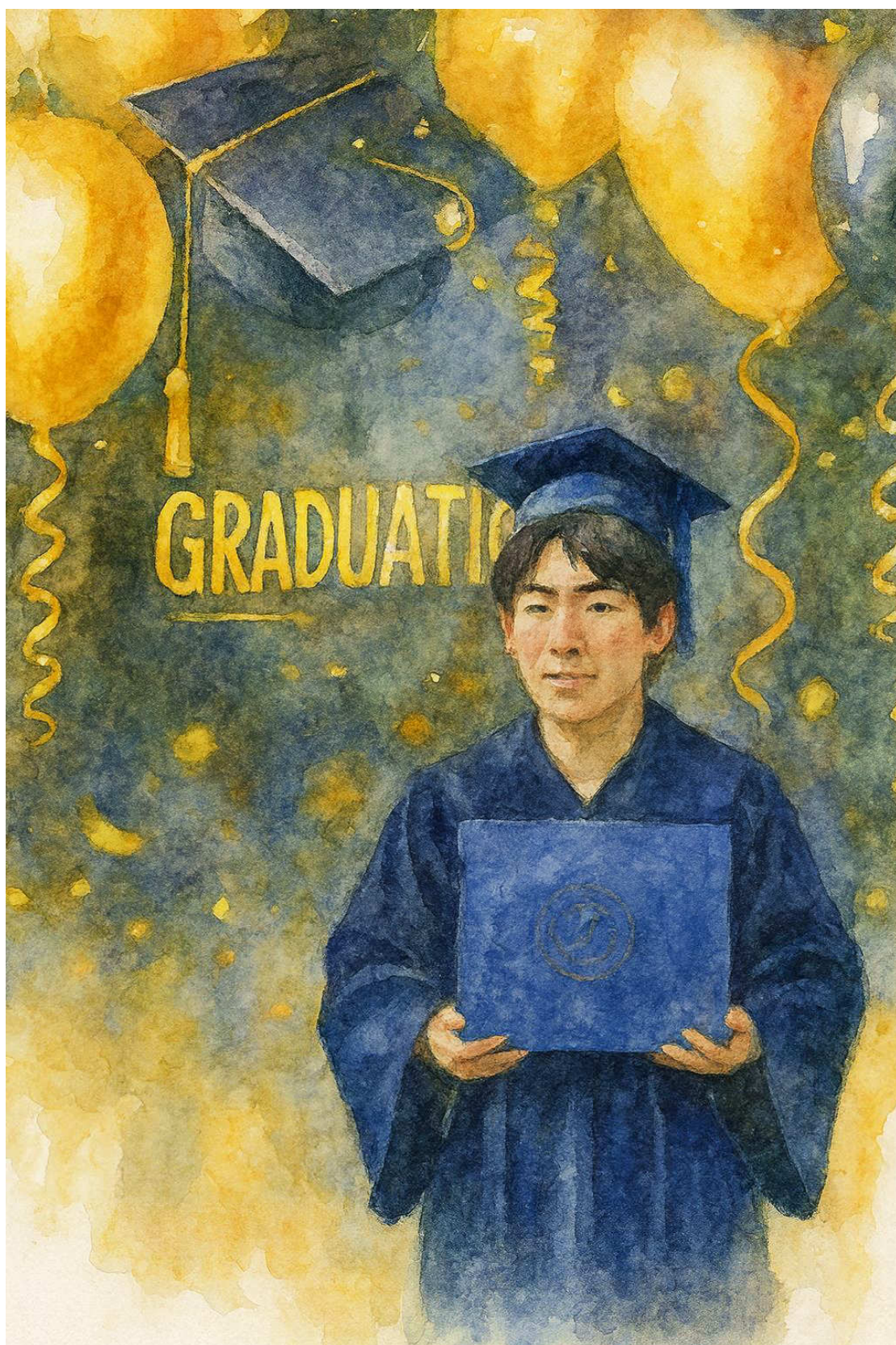
が必要なのです。

制度に合わない子どもたちを「例外」として扱うのではなく、どんな状況にある子にも学びの道が開かれるような社会を、どう築いていくか。

それが、これからの教育に求められる視点だと、私は考えています。

【注】

- 1 文部科学省（2023）「高等学校通信教育の現状と課題に関する報告書」



中学3年生からヨーロッパへサッカー留学
隙間時間を使い、ペンフォスター高校を無事に卒業

+

第2章

誰もが学び直せる社会に向けて

なぜ、いま「もう一つの高校」が必要なのか？

日本の教育制度は、世界的に見ても高い就学率と制度整備を誇る成熟した仕組みである。しかし、その「整いすぎた」制度の陰で、さまざまな理由からその枠組みに適合できない子どもたちが、教育機会から排除される現実がある。

たとえば、長期の病気や発達特性を抱える生徒は、毎日決まった時間に学校へ通うという枠組みにそもそも合わない。いじめや人間関係による不登校、あるいは経済的事情から早期に労働を求められる若者も、「通学して学ぶ」という前提に組み込まれた制度の中では学びの継続が困難となる。

2024年度、文部科学省が発表した不登校児童生徒の数は34万6482人にのぼり、過去最多を記録した³。さらに、通信制高校の生徒数も過去10年で急増し、全高校生の1割以上を占めるまでに拡大している²。こうした統計は、既存の一律的な学校制度が、すべての子どもを包摂できなくなっている現状を明確に示している。

加えて、日本の教育制度では「年齢Ⅱ学年」が前提とされており、途中からの学び直しや早期進学といった柔軟な進路設計は制度上困難である。入学や卒業のタイミングも全国一律で、既存のルールから外れた子どもが再びその路線に戻るには、高い心理的・制度的障壁が存在する。

地理的な教育格差も深刻だ。離島や山間部、過疎地域に暮らす生徒、あるいは海外に在住する日本人家庭の子どもたちにとって、通学できる学校の選択肢が限られ、進学や学習支援を受ける機会も不十分である。「通学できること」が前提の制度では、そもそもスタートラインにすら立てない場合がある。

このような現状において、ペンフォスター高校のようなオンライン高校は、制度の空白地帯を埋める有力な教育インフラとして注目されている。物理的な移動を伴わず、自宅などから高校課程を修了できる。年齢・学年に関係なく、自分のタイミングとペースで学びを進められる。

これは、既存の教育制度の「代替」ではない。むしろ、「制度の隙間」に落ちてしまった学びを再接続し、子どもたちが「自分の人生」に合わせて教育を設計できるようにする「もうひとつの制度」として機能している。教育が万人にとって意味あるものとなるためには、こうした選択肢の拡充こそが、今後ますます重要になるだろう。

【著者の目】

私はこれまで、多くの子どもたちと出会ってきました。その中には、決して本人の努力が足りなかったわけではなく、制度の枠に合わなかったことで、学びを中断せざるを得なかった子も多くいます。

学校に通えなかった理由は、病気や不安、家庭環境などさまざまです。

けれども、そうした子どもたちにも、「勉強したい」という気持ちは確かにありました。

ペンフォスターのようなオンライン高校に出会うことで、もう一度、自分のペースで学びを再開できた生徒たちがいます。

彼らは、時間や場所に縛られず、自分の未来に向かって学び続けています。一人ひとりにとって最適な学びの形は違います。私は、既存の制度に合わない子どもたちを「特別」と見るのではなく、制度のほうが多様性に応えられるように変わっていく必要があると感じています。どの子にも、学び直す権利

があります。

そしてその道は、制度の隙間ではなく、「もう一つの正式なルート」として認められるべきだと、私は信じています。

【注】

1 文部科学省「令和5年度 不登校児童生徒数等調査結果（速報値）」2024年3月発表。

https://www.mext.go.jp/content/20240301-mxt_jidou02-000031117_1.pdf

2 「通信制高校の生徒数が急増 10年で1・5倍超、今や全高校生の1割以上」朝日新聞 EduA（2023年12月）

<https://www.asahi.com/edu/article/14937243>

「学び直し」が困難な日本の教育制度

日本社会においては、「高校中退」人生の挫折」という固定観念が依然として根強く残っている。制度的にも文化的にも、中退経験をもつ若者が再び教育の場に戻るための支援は乏しく、再チャレンジの選択肢が極端に限られている。

たとえば、文部科学省「令和5年度 学校基本調査」によれば、日本の高校中退率は1・3%に過ぎないものの、その実数は年間約4万2000人にのぼる¹⁾。中退の理由には、経済的困難、精神的健康問題、家庭環境の不安定さ、学業不適応、人間関係などが挙げられ、個人の意思や努力だけでは克服したい構造的課題が背景にある。にもかかわらず、日本の高等学校は原則として「18歳で卒業すること」を前提に制度設計されており、再入学や編入、通信制・定時制といった選択肢は形式的に存在しているも、心理的・制度的なハードルは依然として高い。高卒認定試験（旧・大検）は学歴ではなく資格としての扱いであるため、進学や就職において制約を受けることも多い。

こうした背景において、ペンフォスター高校のように、年齢や地域、背景を問わず柔軟に学び直しの機会を提供する教育機関の存在は、重要な意味を持つ。AJインターナショナルアカデミーを通じて入学する生徒のなかには、若年層だけでなく、50代以上の社会人、子育て中の女性、海外在住の日本人家庭の子どもなど、多様な学習者が含まれる。「高校を卒業したい」「人生をやり直したい」という意思をもつ人びとに対して、新たな教育の扉を開く仕組みである。

教育は本来、「若者の特権」ではなく、誰にでも開かれているべきである。年齢や過去の経歴にかかわらず、人が学び直したいと願ったとき、それに応える制度こそが、持続可能な社会の基盤となる。

【著者の目】

「やり直す場所がない」という現実が、どれほど人の心を追い詰めているのか。私は、支援の現場で幾度となく目の当たりにしてきました。「一度ルールから外れたら戻れない」と思い込んで、自分を責め、希望を失っていく若者たちは決して少なくありません。

しかし、「もう一度やり直せる場所がある」と知ったとき、多くの人がふたたび顔を上げ、自分のペースで前に進み始めます。

たとえ過去に挫折や中断があつたとしても、その人が「学びたい」と願った瞬間から、再出発は始まるのだと思います。高校卒業という節目は、進学や就職、あるいは社会生活の中で、多くの「通行証」として機能しています。それが無いことで門前払いされてしまうとすれば、その人が歩むべき道そのものが閉ざされてしまいます。

ペンフォスターのような仕組みが必要とされるのは、そうした現実の中にいる人々に、「学び直しの道はここにある」と具体的に示しているからです。

年齢や住む場所、過去の経歴に関係なく、誰もが「今ここから」学び直せる。私は、その当たり前の感覚が、もっと社会の中に広がっていくことを願っています。

【注】

1 文部科学省「令和5年度 学校基本調査（速報）」2023年。全国の高校中退者数は42,000人超。

https://www.mext.go.jp/content/20230824-mxt_chousa01-0000031961_1.pdf

多様な学習者が求める「場所に縛られない学び」

現在の教育現場には、学びのスタイルやタイミングにおいて、既存の枠組みに収まりきらない、多様な学習者が存在している。たとえば、海外に住む子どもたち、スポーツや芸術に打ち込む若者、家庭の事情で通学が難しい生徒、あるいは一度進学を断念し社会に出たあとに再び学びを求める大人たち。その背景は実にさまざまである。こうした多様なニーズに応える柔軟な教育制度の必要性は、かつてないほど高まっている。たとえば、保護者の転勤により海外に居住する日本人家庭においては、現地校への編入やインターナショナルスクールの学費負担、学習言語の違いといった障壁が日常的に発生している。その一方で、日本の高等学校制度は基本的に通学を前提として設計されており、海外在住者が日本の高校卒業資格を取得するための制度的な選択肢は極めて限られている¹。こうした事情から、帰国後の進学や進路選択に対する不安が蓄積されるケースも少なくない。

また、芸術・芸能活動、スポーツ、起業などに取り組む若者にとっては、従来型の「時間割」や「通学」を前提とした教育スタイルが、かえって自己実現の妨げとなる場合もある。さらに、不登校の経験を持つ生徒にとっては、「学校」という物理的空間そのものが心理的障壁となり、学びへのアクセスを阻害する要因にもなり得る。

こうした多様な事情のなかで、ペンフォスターの教育モデルは、「場所に縛られない学び」の可能性を具現化している。完全オンラインによる教材提供、クラウドベースでの進捗管理、365日・24時間いつでもアクセス可能な学習環境、そして随時対応可能な学生サポート体制——これらの仕組みは、従来の制度の枠外にいた学習者にとって、有効な選択肢となっている。

ペンフォスターで学んでいる生徒たちの属性も、極めて多様である。たとえば以下のような事例が挙げられる。

- アメリカ、タイ、シンガポールなどに在住する日本人家庭の中高生
- 不登校の経験を経て、自宅で学び直しを始めた10代・20代の若者
- 高校中退後にアルバイトや非正規雇用を続けながら再チャレンジする社会人
- 芸能活動やアスリートとしてのキャリアと両立しながら学び続ける生徒

彼らの多くが、「ようやく自分に合った学びのスタイルに出会えた」と語っている。学びを再開するき

っかけも、学び続ける動機も、学習スタイルも人それぞれであり、正解は一つではない。だからこそ、教育制度は「標準化」ではなく、「多様化」へと転換する必要がある。

教育の本質とは、「どこで学ぶか」ではなく、「何を学び、どう生きるかを考えること」にある。ペンフォスターが提示している学びのあり方は、個人のライフスタイルに応じて設計された新しい教育の形態であり、日本における「制度外の選択肢」として、今後ますます重要な役割を果たしていくと考えられる。

【著者の目】

私たちが支援してきた子どもたちの中には、日本では一度も教室に通ったことがない生徒もいます。親の仕事で海外を転々とし、言葉の壁や教育制度の違いに悩みながら、それでも「高校卒業」を目指して努力を重ねてきたのです。

また、芸能の世界に身を置く若者が、撮影の合間にレポートに取り組み、夜中に動画授業を視聴していた姿も見てきました。学ぶ時間も場所もバラバラ。でも、彼らには確かに「学びたい」という意思がありました。

「学校に通えない子どもたち」ではなく、「どこでも学べる時代の子どもたち」として捉え直すべき時代が、すでに始まっているのだと思います。その視点の転換こそが、多様な学びを支える社会の前提になるのではないでしょうか。

【注】

1 外務省「海外在留邦人数調査統計（令和4年）」によれば、海外で暮らす日本人は約135万人にのぼり、そのうち18歳未満は約23万人とされている。うち、継続的な日本式教育を受けられる者は限定的である。

<https://www.mofa.go.jp/mofA/toko/tokei/hojin/>

再出発を支える「セカンドチャンス」の設計

「高校を卒業できなかった」「学校に馴染めなかった」「一度は社会に出たけれど、やっぱり学び直したい」そうした声を、私たちは数多く聞いてきた。そして、それらは決して特別な声ではない。人生のどこかで一度、学びのルールを外れてしまうことは、誰にでも起こりうる現実である。

だが日本の教育制度は、そうした「やり直し」に対して、必ずしも寛容ではない。高校卒業資格を取得し直すには、通信制高校や定時制高校への再入学、あるいは高卒認定試験の受験など、選択肢こそあるが、その多くが制度上の制限や生活上の負担を伴う¹。

その点において、ペンフォスターが提供するオンライン高校の仕組みは、「人生をやり直す」ための現実的な選択肢として、極めて大きな意義を持っている。

第一に、このプログラムは年齢制限がない。10代の若者はもちろん、20代・30代の社会人や、

子育てを終えた40代・50代の保護者世代までもが、同じ仕組みの中で学び、卒業資格を得ることができる。「高校卒業」はもはや、10代の専有物ではないのだ。

第二に、学習のペースとスタイルが完全に個人に委ねられている。日中は仕事をして、夜に少しずつ進める。週末だけ集中して取り組む。1年で一気に終わる。3年かけてゆっくり進む。どれもすべて、正解である。画一的な学習時間や在籍年数に縛られないということは、それだけで多くの人にとって「可能性」を意味する。

第三に、「学び直し」に必要なサポートが手厚いことも見逃せない。オンラインによるレッスンガイドや解説動画、そしてサポートするスクール（例えばAJインターナショナルアカデミー）による日本語での学習支援体制など、孤立しがちな再出発の学びを確実に支える設計がなされている。

ペンフォスターで卒業資格を得た社会人の中には、大学や専門学校への進学を果たし、教育・福祉・ITなどの分野で新たなキャリアを歩み出している人もいる。「今さら勉強して何になるのか」という声が聞こえることもあるが、学びの意味とは、年齢や職業によって測られるものではない。大切なのは、「もう一度、学びたい」と思えたその気持ちに、きちんと応えられる教育の仕組みがあるかどうかだ。教育とは、社会から「こぼれ落ちた人」を拾い上げるものでもある。そして、「セカンドチャンス」が機能する社会こそが、成熟した社会であるといえる。ペンフォスターのモデルは、そのための実践的なツールであり、日本の教育が目指すべき「包摂性」を体現している。

【著者の目】

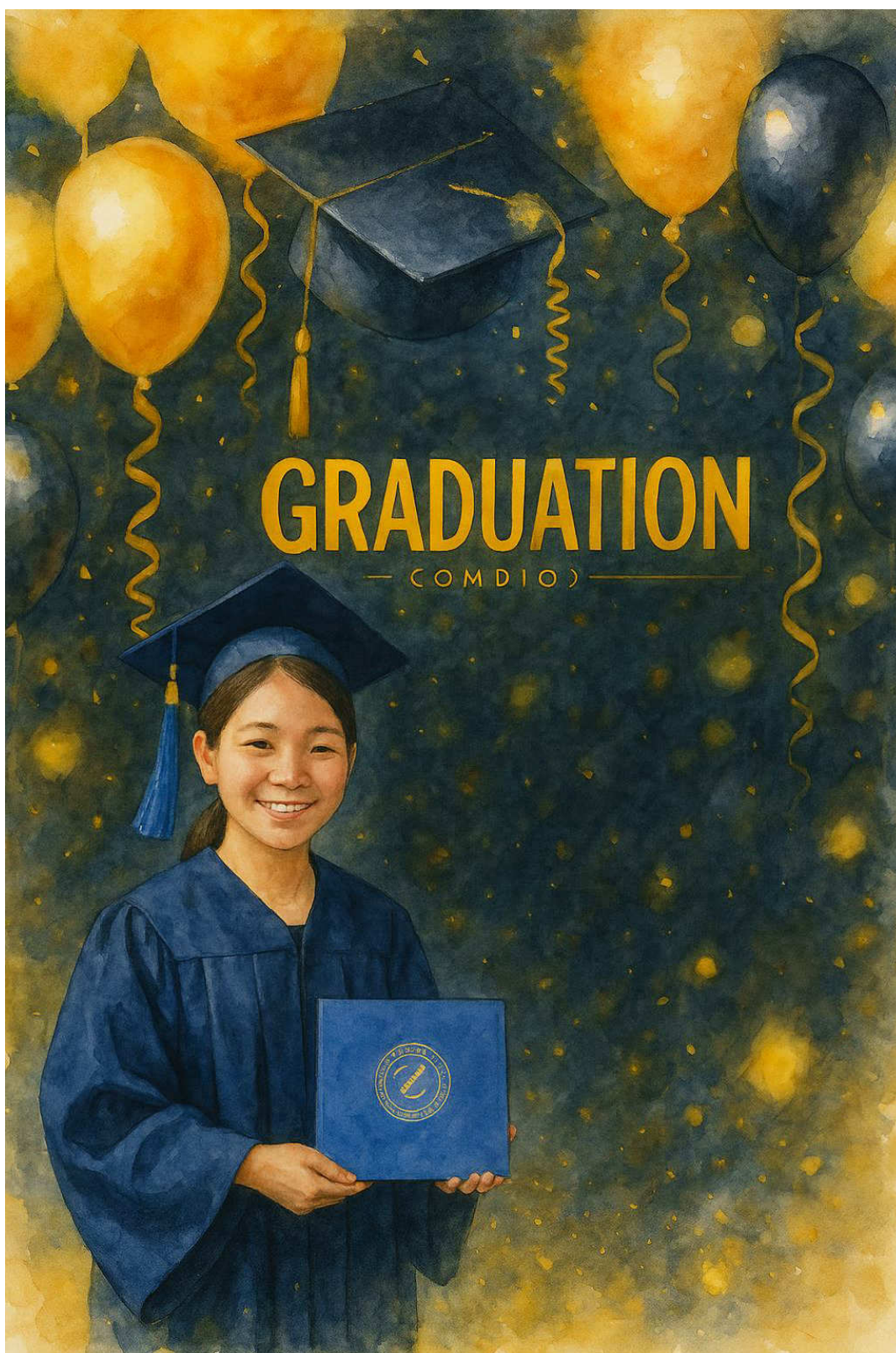
私たちが支援してきた中で、印象に残っている40代の女性がいます。高校中退後、結婚と出産、子育てを経て、ふと「もう一度、自分の人生を考えたい」と思ったそうです。家事とパートの合間を縫って勉強を続け、2年かけて卒業資格を取得しました。

また、20代の若者が「高校でつまづいた自分を、ようやく許せた気がします」と話してくれたこともありました。成績や年齢とは関係なく、「やり直せる」こと自体が、その人の人生にとって大きな意味を持つのだと、あらためて感じました。

学びの再出発に年齢は関係ありません。「やり直したい」と思えたときに、それを受け止める制度と人がある。その当たり前のようで難しい環境づくりを、私たちはこれからも続けていきたいと思っています。

【注】

- 1 文部科学省「高等学校中途退学者への支援」では、再入学の制度的選択肢や高卒認定試験の紹介はなされているが、実際の再入学率は極めて低く、制度利用の実効性には疑問が残る。再出発を支える制度の整備と同時に、学習支援や心理的支援の強化が必要とされている。https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/04121502/0215.htm



高校3年の1学期で、中退。ペンフォスター高校入学。
同年11月に卒業。「このままでは中卒」という状況から、大学受験に間に合いました。

第4章 学びの現場から――生徒・保護者の声

生徒の声…不登校から進学へ／海外からの受講／社会人の学び直し

ペンフォスター高校の教育システムは、多様な背景や事情を抱えた学習者に対し、柔軟かつ実効性の高い教育機会を提供している。その構造は、「従来型の教育制度」からこぼれ落ちてしまった学習者にとって、新たな選択肢となっている。とりわけ注目すべきは、不登校経験者、海外在住者、社会人学習者など、さまざまなライフステージにある人々が、再び学びを取り戻す機会を得ている点である。

以下に示すのは、実際にペンフォスターで学びを進めている、あるいは修了した日本人生徒たちの声である。

「不登校だった私が、大学進学を目指せるようになった」

神奈川県在住／17歳・女子

中学3年から不登校となり、高校進学をあきらめかけていたが、母親のすすめでペンフォスターに出会った。自宅で自分のペースで学べるという仕組みが精神的な安心につながり、現在は高校課程を修了し、大学への進学を目指している。

「いわゆる『普通の高校生』にはなれなかったけど、私は『自分のペースで学ぶ高校生』になりました。」

「海外駐在中でも、日本とつながった学びができた」

マレーシア在住／15歳・男子

父親の海外赴任によりマレーシアに移住。現地校での適応が難しかったが、ペンフォスターを通じて英語で学びながら、日本の教育サポートが受けられる体制に安心感を得た。国が違っても学習環境を確保できたことが、継続の鍵となっている。

「海外にいても、僕が勉強する機会は失われなかった。」

「働きながら、もう一度学び直した」

東京都在住／21歳・男性

高校中退後、就職と転職を繰り返していたが、将来の選択肢を広げるために高校卒業資格の取得を決意。日中は勤務、夜間にオンラインで学習する生活を続け、1年半で修了を果たした。

「忙しい毎日でしたが、『自分で選んだ学び』だったから続けられたと思います。」

これらの証言は、ペンフォスターが単に高校卒業資格を得るための手段ではなく、一人ひとりの人生と向き合いながら、学びを再構築していく「場」として機能していることを示している。教育は一方的に「与えられるもの」ではなく、自らが「選び取るもの」であるという認識が、こうした学びの実践を通

じて育まれている。

【著者の目】

私はこれまで、さまざまな背景を持つ若者たちと接してきました。彼らの多くは、決して「意欲がない」わけでも、「能力が足りない」わけでもありません。単に「その時の制度が合わなかった」というだけのことが、人生に大きな影響を及ぼしているのです。

たとえば、不登校だった生徒が、家庭という安全な場所で、少しずつ学びを取り戻していく姿を見ってきました。海外で孤立していた生徒が、「オンライン教育を通して日本とつながれた」と語ってくれたこともあります。仕事の合間に夜中まで勉強を続けた若者が、「自分で選んだ道だから頑張れた」と笑って卒業証書を受け取った瞬間も忘れられません。

私は、制度の「内側」と「外側」という分け方そのものに、問いを感じています。ペンフォスターのような教育機関が存在することで、制度の外にいたはずの人々が、もう一度「教育の輪」に戻れる。それは教育機会の再分配という意味以上に、「社会が一人の人間をどう扱うか」という根源的な問題に関わることだと感じています。

学びは、個人の人生にとっただけでなく、社会のあり方そのものに深く関わる営みです。私たちはそのことを、こうした生徒たちの言葉から改めて教えられているのだと思います。

保護者の声…子どもの変化と家庭でのサポート体験

ペンフォオスターの導入は、生徒本人だけでなく、その保護者にとっても大きな転機となることが多い。近年の教育論では、「個別最適な学び」が重視される傾向にあるが、実際に家庭の中でその学びをどう支えるかという視点は、まだ十分に可視化されていない。ペンフォオスターを通じて子どもたちの学びを見守った保護者たちは、共通して「本人の変化」と「家庭の在り方の変化」の双方を語っている。以下は、実際にペンフォオスターに子どもを通わせた保護者の声である。

「不登校だった娘が、笑顔で学び始めました」

神奈川県・母親（50代）

中学2年で不登校となった娘は、高校進学をあきらめかけていたが、ペンフォオスターの存在を知り、自宅での学習を再開した。「最初は半信半疑でした。でも、毎日少しずつ前に進んでいく娘の姿を見て、『あの子らしさを取り戻している』と感じました。」

「海外赴任でも、教育の継続に困らなかった」

アメリカ在住・父親（40代）

企業の海外赴任により、現地校への適応が難しくなった子どものために、家庭で代替の教育手段を模索。ペンフォスターは、英語による学習とAJインターナショナルアカデミーによる日本語サポートの両立が可能であったことから、家族全体の安心につながった。

『世界のどこにいても、学べる環境がある』という事実には、どれだけ救われたかわかりません。」

「進路を諦めかけた息子が、再び前を向いた」

福岡県・母親（40代）

高校中退後の息子に、もう一度学ぶ機会を与えたいと願い、複数の通信制高校を検討。最終的に、学習ペースを自分で設定できるペンフォスターを選んだ。

『勉強が苦手』だった息子が、自分で学び方を決める中で、少しずつ自信を取り戻していきました。」

これらの事例は、単なる「卒業資格の取得」ではなく、「子どもの再出発と成長のプロセス」に対する家庭の希望と努力を映し出している。ペンフォスターが提供するのは制度ではあるが、その制度が家庭という小さな社会の中で、確かな役割を果たしていることがわかる。

【著者の目】

保護者の方々と接していると、「子どものために最善を尽くしたい」という一貫した思いを感じます。多くの方が、学校に行けなくなった子や、海外で孤立しかけた子、進路に悩む子どもたちに寄り添いながら、模索と決断を繰り返しています。とくに印象的なのは、家庭の中で「学び直しの場」をつくろうとする努力です。教育機関に任せるだけでなく、「家庭もまた学びの現場になる」という覚悟を持っておられる方が多くいらっしゃいます。ときには、家族全体の生活スタイルや価値観そのものを見直すことにもつながっています。

私は、保護者が「教育の当事者」であるという意識を持つことが、これからの教育には欠かせないと考えています。そして、それを支える制度が存在することが、選択肢を広げ、子どもたちの未来を切り開く力になります。

ペンフォスターのような制度は、単に「特別なケースに対応する仕組み」ではなく、「当たり前前の選択肢」として社会に根付いていくべきものだと、私は信じています。

メッセージ…卒業生からこれからの受講生へ

近年、学び直しの機会を提供する制度が注目を集めるなかで、実際にその制度を活用し、高校課程を修了した卒業生たちの声は、制度の有効性を語る重要な証言となる。とりわけ、困難な状況に置かれて

いた若者や、学びから一度離れた人々が、再び学びに向き合い、成果を得た事例は、同様の境遇にある受講希望者にとっての励みとなる¹⁾。

以下に示すのは、ペンフォスターを卒業した元受講生が、それぞれの背景から語った経験と、次世代の学び手に向けたメッセージである。

「あるとき、あきらめなくてよかった」

不登校から再スタートし、都内私立大学へ進学したSさん（女性）

「中学1年からずっと学校に通えなくて、将来が見えなくなっていました。でもペンフォスターの存在を知って、『ここならやれるかも』と思えたんです。日本の高校に行っていないことがコンプレックスだったけど、アメリカの高校卒業資格を得られたことで、自信が持てました。今は心理学を学んでいて、将来は不登校の子どもを支える仕事がしたい。あるとき、あきらめなくて本当によかったです。」

「どこにいても、学びは止められない」

親の転勤で東南アジアに在住しながら受講したMくん（男性）

「日本の学校に通えない環境だったけれど、オンラインで学べるペンフォスターのおかげで、自分のリズムで勉強を続けることができました。時差や環境の違いも、自分で調整しながら進められるのが魅力。『このままだと中卒』という状況から、周囲の同い年の友達よりも早く高校を卒業できて、まさに一発逆転（笑）本当に感謝です。今は大学で国際関係学を学んでいます。この制度を知れたのが、私の転機でした。」

「社会人でも、遅すぎることはなかった」

高卒認定を取得後、社会人経験を経て学び直したYさん（男性）

「高校を辞めてから10年が経っていました。今さら勉強なんて…とっていたけれど、仕事の合間に少しずつ進められるこの制度に救われました。年齢や過去は関係なく、『今、やりたいかどうか』だけ。アメリカの高校卒業資格を得たあと、専門学校で医療分野を学び、今は介護職として働いています。『遅すぎることはない』って、過去の自分に言いたいです。」

「バレエも学びも、自分のペースで両立できた」

ヨーロッパでのバレエ留学と並行して受講したRさん（女性）

「子どもの頃からの夢だった海外バレエ留学が決まり、高校に通うのは難しくなっていました。でも、学びをあきらめたくなかった。ペンフォスターは、空き時間に少しずつ進められて、レッスンがない日の午後や夜に自分のペースで学べました。バレエと勉強を両立できたことが自信になって、今は現地の大学を目指しています。『自分の時間』を大切にできた3年間でした。」

「英語の勉強の延長ではじめました」

高校はもちろん、大学も大学院も出ている60代Iさん（男性）

「英語が好きだったので、その延長として入学しました。実際に使われている教材は、予想以上に平易な英語で書かれており、意外に楽しめながら学習を進めることができました。中でもアメリカ史や世界史の授業を通じて、アメリカという国がどのように意思決定を行い、なぜ特定の態度を取るのかといった背景を理解できたように思います。物理や文学の内容も非常に興味深く、学ぶ喜びを感じました。英語力だけでなく、幅広い教養も身についたと実感しています。」

こうした卒業生の言葉は、制度や教材の評価を超えて、「学び直す勇氣」そのものの証明である。そして何よりも、「これから学ぼうとする人」にとっての、最も心強いメッセージでもある。

【著者の目】

Rさんのように、芸術の道を目指す生徒にとって、時間の自由は命綱とも言えるほど大切です。日本の高校制度では、日中の授業出席が前提となっており、バレエや音楽などの専門訓練と両立するのは極めて困難です。

しかし、ペンフォスターの学習スタイルは、その前提を根本から問い直します。何時に学ぶか、どこで学ぶか、どの順番で学ぶか――すべてが本人の裁量に委ねられているからこそ、夢を追いながら高校卒業資格も取得することができるのです。

この制度は「救済策」ではなく、「可能性を拓く選択肢」であるべきです。学びと夢の両立をあきらめなかった彼女の姿から、それを私は改めて教えられました。また、「定年退職後の学び」として入学されたIさんには、頭がさがります。学ぶこと、学び続けることの大切さを、教えていただきました。

多様な生き方に応える教育制度は、もはや「特例」ではなく、これからの時代の「前提」になっていくべきだと、私は確信しています。そして、その確かさは、制度の説明以上に、こうした卒業生の言葉が一番雄弁に語ってくれます。



バレエ留学とペンフォスター高校を両立！

第7章 声を聴く――ペンフォスター――高校 早期卒業体験記

上間琉乙心さん ― 15歳で大学へ

お姉さんもペンフォスター高校の卒業生で、15歳で高校を卒業し、16歳で大学生になっていました。そんなお姉さんを身近に見てきたルイミさんは、中学3年生の4月にペンフォスター高校に入学しました。ここでは、その体験談を紹介します。上間琉乙心さんは、中学卒業後、15歳で大学生になりました。

私がペンフォスター高校を選んだのは、自分の意志というよりも母の勧めからでした。将来の職業のために英語に力を入れている高校やインターナショナルスクールを考えていた母が、「もしインターナショナルスクールを選んでも困らないように、早めに慣れておこう」ということで選びました。

ただ、入学する前は三日坊主の傾向がある私に母もかなり悩んでいました。友人からは「羨ましい」と言われましたが、周囲の反応はあまり良くなく、「そんなに急ぐ必要はない」という声が圧倒的に多かったです。それでも応援してくれる先生が数名いて、とても支えになりました。

中学校と同時進行だったので、最初はすき間時間でちょこちょこ進めていました。ですが、「中学校卒業と同時に大学に行きたい」と決めてからは夏休みに集中して取り組み、一日1〜2科目を終わらせるペースで進めました。オンライン学習は正直、楽しいものではなく根気がいるものです。途中で投げ出しなくなったり嫌になったりすることもありました。だからこそ、家族に進捗を話して褒めてもらったり

アドバイスをもらったりして、何度も目標を確認することが大事でした。

オンラインの良いところは、他の生徒との接点がないので他人の目を気にせず堂々とできること。でもその反面、おしゃべりな自分には少し寂しかったです。また、先生とやり取りできるのは質問やテスト返却のときだけで、「高校に通っている」というよりは「勉強する媒体に触れている」という感覚でした。

その分、私はAJインターナショナルアカデミーの「日本赤十字社・青少年赤十字部」¹に入部しました。赤十字の活動では、普段のオンライン学習では得られない人間関係を築けましたし、たくさんの仲間ができ、赤十字のスタッフの方々ととても仲良くなれました。特に4泊5日の「リーダーシップ・トレーニング・センター」とよばれる宿泊型の研修会では、指示役がいない中で一人ひとりが必要な行動をし、全体に意見を伝えていく環境で、最初は戸惑いましたが、仲間やスタッフの支えもあって徐々に慣れ、状況を把握して自分の考えを発信できるようになりました。

中学3年で共通テストを受けたのは、ペンフォスター高校がCogniaに認定されていて、ペンフォスター高校の卒業が日本の大学受験資格になると知り、「面白そう」と思ったからです。試験会場の緊張感は想像以上でしたが、私は空気を読みすぎない性格なので、休憩中はYouTubeを見ながらお菓子を食べてリラックスしていました。結果は、国語で平均以上、英語リーディングは9割と予想以上。家族でお祭り騒ぎになったのを覚えています。

大学は昭和女子大学に進学しました。テンプル大学との連携やダブルディグリープログラムが決め手でした。女子大に対して先入観もありましたが、入学してみると「中高の内容を新鮮に覚えている」こ

とが武器になっていると感じます。私は好奇心が旺盛で、物事を深掘りして納得するまで取り組むので、知識量に自信があります。

ペンフォスターで学んだことは、今もとても役立っています。計画力や自己管理能力、孤独な中で集中力を保つ工夫は、今の学びや課題にも生きています。外交官を目指す今、変化を楽しみながら自己を更新していく姿勢が強みになると信じています。

上間さんから、後輩へのメッセージ

早く高校生になりたいだけとか、特別な目で見られただけで学びを急ごうとしているのであれば、今すぐ本来の道に戻った方がいいと私は思います。本来とは違う進み方をすれば、確かに特別な存在にはなれるかもしれませんが、その代償もしっかりとあります。たとえば「早く高校生になりたい」という理由だけでペンフォスター高校に入学しても、学歴の面だけが特別になれる一方で、ソーシャルスキルや基礎知識・技術が不足してしまうこともあるのです。だからこそ、一度立ち止まって「自分はなぜ学びたいのか」を考えることが大切です。

学びとは「速さ」ではなく「深さ」によって見える世界が変わってきます。知識をどれだけ詰め込んだかではなく、「自分は何に惹かれ、何に違和感を覚えるのか」を問い続けることが、本当の意味での学びにつながるかと私は信じています。

そしてもうひとつ大切なのは、「自分の選択をどう生かすか」という姿勢です。たとえ早く進んだとし

ても、その経験をどう自分の糧にするかで意味は大きく変わります。私はペンフォスターでの学びを通して、孤独や迷いの中で計画力や自己管理能力を養い、同時に赤十字の活動で仲間と出会い、人間関係やリーダーシップを学びました。もしスピードを求めるだけなら得られなかったものだと思います。だから後輩のみなさんにも、速さにとらわれず、自分の中にある問いや違和感を大切にしてほしい。学びは「早く終わること」ではなく、「どれだけ自分を深め、広げていけるか」にこそ価値があるのだと思います。

【注】

- 1 青少年赤十字 (Junior Red Cross, 通称 JRC) は、日本赤十字社が展開する青少年教育活動で、奉仕・友情・国際理解を柱に、学校や地域を拠点として子どもや若者が参加する組織。AJインターナショナルアカデミーは日本赤十字社の青少年赤十字に正式に加盟しており、特に日本の高校に所属していない生徒に対して、活動や交流の場を提供している。

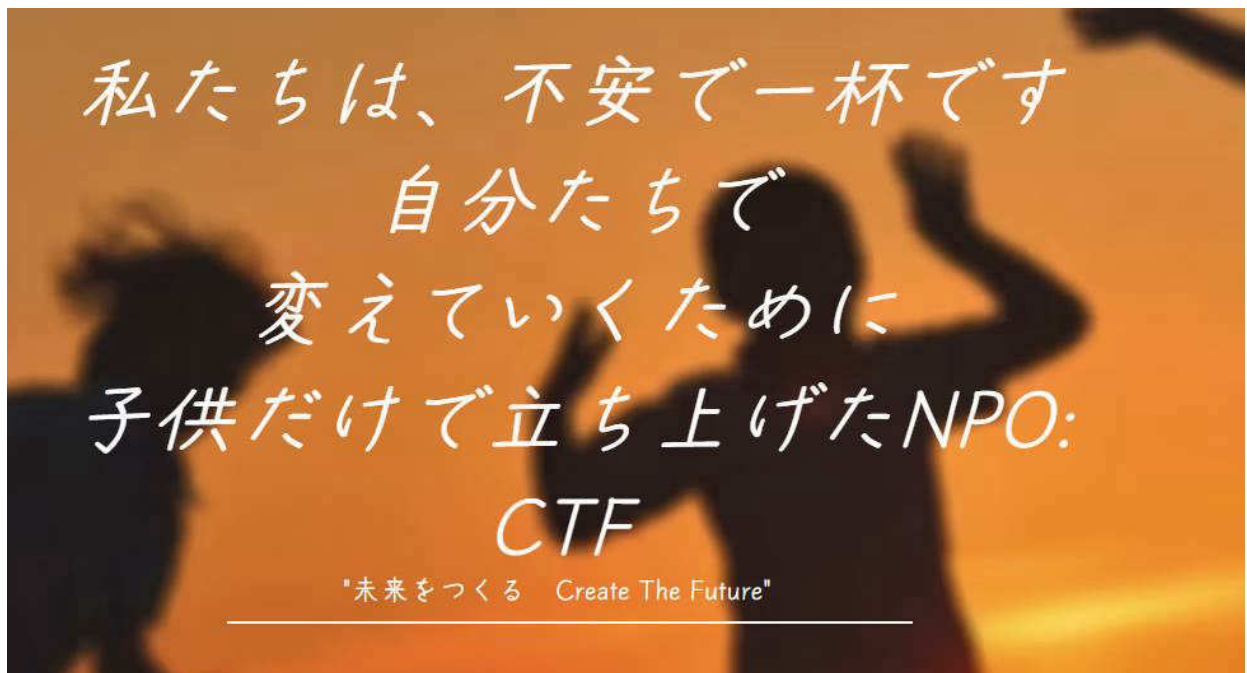


上間琉乙心さん（15歳）
中学3年生でペンフォスター高校を卒業
大学入学共通テストを受験し、中学卒業後は昭和女子
大へ進学した。

第8章 トンガで育ち、日本で挑む――横山シシファ美麗さんの教育地図

不登校支援を目的に活動するNPO法人「CTF (Create The Future)」を率いている理事長は、若干16歳の高校生だ。「Create The Future (未来をつくる)」という団体名には、子どもたち自身がこれからの社会を形づくっていくという決意が込められている。そのためにCTFは、子どもたちの声を起点に地域や学校、行政との対話を広げている。その理事長を務めるのが横山シシア美麗さんである。幼少期から9年間を南太平洋の島国トンガで過ごした経験を持ち、現在はペンフォスター高校に在籍しながら、日本を拠点に活動を続けている。

彼女が最も強く記憶しているのは、トンガに移住して最初の2年半の暮らしだ。電気も水道もガスもなく、冷蔵庫や洗濯機といった文明の利器は一切なかった。生まれ育った日本では当たり前にあると思っていたものが、突然すべて手の届かないものになる。最初は不安で、暗闇が怖かった。街灯も家の明かりもない夜は、漆黒の闇が広がっていたからだ。けれど、その闇はやがて忘れられない景色を見せてくれた。頭上に広がる星空や月の光は驚くほど明るく、自分を照らしてくれる



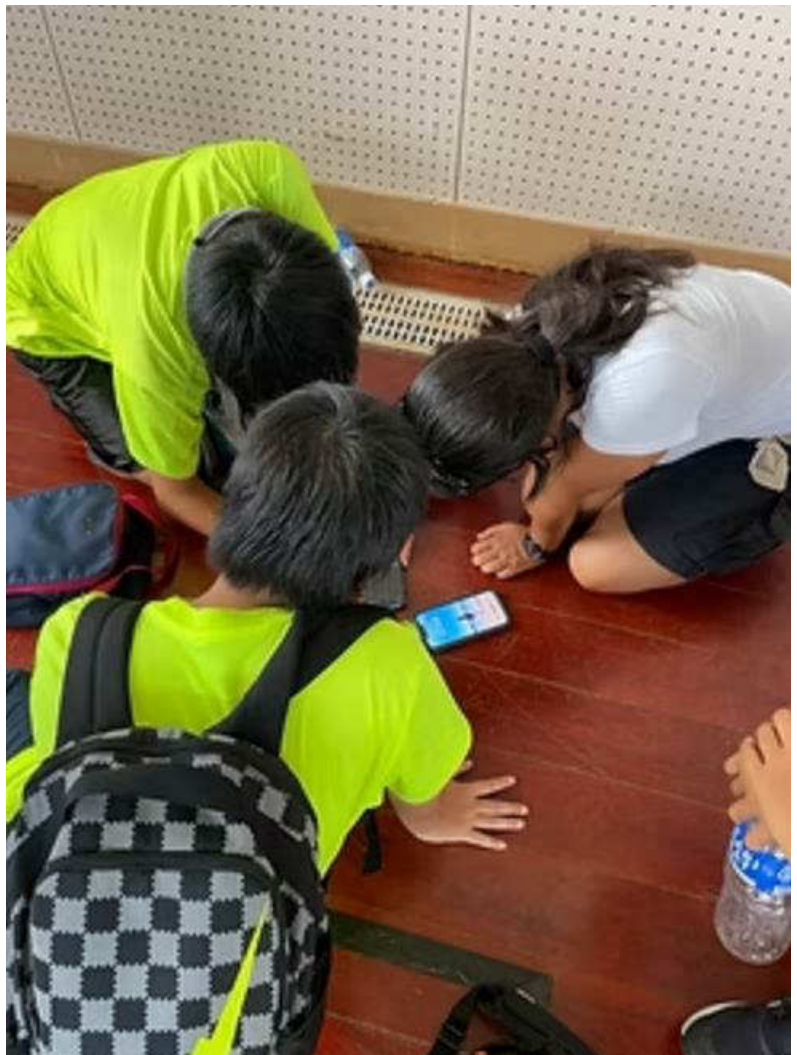
ものが自然に存在していることを教えてくれた。母と一緒に外で服を手洗いしたり、食べ物を自分たちの手で得る生活は、生きるということの実感を与え、便利さに隠されていた「ありがたさ」を体に刻んだ。彼女は「一生忘れない経験」としてその日々を語る。

しかし、そこで目にしたのは単なる自然の豊かさだけではなかった。教育や医療の整備は不十分で、子どもたちにとっては厳しい環境もあった。それでも、子どもたちは学校に行かなくなることもなく、自ら命を絶つ子もほとんどいなかった。その一方で、日本に帰国したときに見た現実は大きな衝撃だった。必要なものがすべて整い、豊かで平和なはずの環境にしながら、多くの子どもたちが不登校になり、命を絶つという深刻な現状がある。彼女は「なぜなのか」と混乱し、日本とトンガという両極端な社会を体験したからこそ、教育や社会の「当たり前」を問い直す視点を持つようになった。

異文化で育ったことは、横山さんに二つの力を与えた。一つは、当たり前ものに感謝する心であり、もう一つは「普通」とされている価値観に違和感を覚える感性である。その両方が、彼女を16歳でNPO法人を立ち上げる行動へと駆り立てた。単に「思い」を口にするだけでは何も変わらない。けれど、組織という形をとれば、子どもの声を社会に届ける力になる。夢を語るだけの一人の子どもではなく、多くの仲間とともに行動できる主体になれる。彼女はそう考え、行動に踏み切った。

もちろん、その決断にすぐ賛同が集まったわけではない。教育制度や支援制度が子どもを救えていない現状に共感し、応援してくれる人もいたが、同時に「責任を取るには若すぎる」「無理だ」という声も浴びた。彼女にとっては年齢ゆえの偏見や壁が最初の大きな試練だった。しかし、それでも横山さんは歩みを止めなかった。

現在、CTFの活動の一つは、学校に通えなかったり、人とのコミュニケーションに困難を抱える子どもたちとスポーツを通じて交流することだ。彼らにとって最初の一步はとても大変で、緊張や不安でいっぱいになる。だが二回目には「自分の意思で来たい」と言ってくれる子がいる。自然に笑顔を見せたり、少しずつ言葉を発するようになったりする子どもたちの変化を目の当たりにすると、自分たちの活動には確かに意味があるのだと強く感じられるという。活動の喜びとプレッシャー、その両方を抱えながらも彼女は歩を進めている。



横山さんのもう一つの柱は学びだ。今取り組んでいるのは、ペンフォスター高校での柔軟な学びである。「日本の学校は昔からのやり方が色濃く残っていて、教育の方法があまり変わっていないと感じます。その中で、多くの子どもが決められた型にはめられ、伸びるはずの可能性を制限されています。一方でペンフォスター高校では、自分の学びたいことに集中でき、夢を追うための時間と空間がえられています。」そう語る彼女にとって、もし制度の中の普通の高校に通っていたら、今のように自由に活動することはできなかっただろう。ペンフォスター高校での学びがあったからこそ、NPOの活動と両立し、未来へとつながる挑戦が可能になったのだ。

「場所や年齢に縛られない学び」とは何かと問うと、彼女は「自分が大切にしていることに集中し、夢に向かって進める自由」と答えた。その自由が、NPOの活動と学びを支え、さらに広い未来を描く原動力になっている。

トンガで得たのは命の大切さと感謝の心。日本を外から見たことで抱いたのは「困っている子どもを助きたい」という願い。そしてペンフォスター高校の学びは、時間や場所に縛られずに夢を追えるという確信を与えている。この三つが彼女の中でつながり、未来を変えるための活動の基盤になっている。では、彼女が思い描く未来の教育はどんな姿なのか。「子どもたちの個性を伸ばし、卒業後に社会で活かせる能力を育てる教育です。枠に合わないからといって遅れている、失敗していると感じることがなく、自分の得意や好きを伸ばせる教育であってほしい。」そのために変えるべきだと考えているのは、暗記中心の詰め込み教育だ。試験のための知識に偏ってしまう現状に疑問を抱き、子どもたちはもっと早い時期から才能や強みを伸ばしていくべきだと語る。「技術が進歩して必要とされる知識が変わってい

く中で、時代にそぐわない学びに何年も時間をかけることに意味があるのか、問い直す必要があるのではないだろうか。」と問いかけるその言葉には、未来を見据える確信がにじむ。

子どもが社会の主体になるとはどういうことかと問うと、彼女は即答した。「私たち子どもがこれから生きる世界のために行動し、声を上げられることです。子どもは未来であり、今作られている社会に実際に生きる存在だからです。」そして10年後のビジョンをこう描く。「子どもと大人がもっとコミュニケーションをとり、協力しながら問題解決や新しい社会づくりに挑戦できる社会にしたいです。」

最後に、同世代へのメッセージを尋ねた。「変化を願うだけでは何も起こりません。自分から行動を起こすことが大切です。」そして大人たちに向けてもはつきりと言葉を残した。「これまでのやり方が、いつの時代にも最適だとは限りません。子どもたちの声に耳を傾け、ともに未来をつくっていただきたいと思います。」

横山さんは今後、CTFの活動を通じて、ペンフォスター高校という学びの選択肢をもっと多くの人に知ってもらいたいと考えている。自分がそうであったように、制度の枠からこぼれ落ちそうな子どもたちに、新しい学びの可能性を届けたいからだ。

16歳という年齢に似つかわしくないほどの覚悟と、同世代だからこそその感性。その両方を武器に、横山シシファ美麗さんは未来を切り開こうとしている。その姿は、「教育の未来地図」に描かれるべき、新しい風景そのものだ。

特定非営利活動法人 CTF (Create The Future)

私たちはみんな異なる背景や経験、そしてさまざまな課題を抱えて生きてきました。けれど、ひとつだけ共通しているものがあります。

それは「変化を望む心」です。メンバー一人一人に語りたいストーリーがあり、社会の基準や学校生活に馴染めず悩んだ人もいれば、自分の才能を育てて大切なものに変えたいと願う人もいます。環境や動物、自然災害について強く関心を持ち、行動したいと考える人もいます。

私たちは本当に様々です。世界をそれぞれの視点で見えています。だからこそ、その多様性が私たちの強みであり、世界を変えるために動き出したユニークで力強いグループなのです。

代表理事 横山シシファ美麗

所在地：〒901-0303 沖縄県糸満市字阿波根 1406-248

設立：2025 年 7 月

活動内容：不登校支援を中心に、子どもたちの声を社会へ届けるための調査・ワークショップ・交流事業を展開

公式サイト：<https://www.npocf.org/>

エピソード

ギャップイヤーから始まる「生きる学び」

ペンフォスター高校は、中学卒業後すぐに入学し、単位を計画的に修得することで、高校課程を早期に修了することが可能なオンライン制の高校である。通常の3年間の高校生活を経ることなく、1年半〜2年ほどで卒業する生徒も多く、高校3年生の途中で転入した場合でも、それまでに修得した単位が認定され、短期間で卒業に至るケースもある。この柔軟な制度設計は、生徒が自らのペースで学びを進められることを意味し、「周囲より遅れている」「出遅れた」といった感覚に囚われることのない、自己主導の学びを可能にしている。

この制度がもたらす最大の恩恵のひとつが、「ギャップイヤー」と呼ばれる時間である。ギャップイヤーとは、進学や就職の前に意図的に設ける「空白の期間」を指し、自己探求や社会体験、異文化交流のための自由な時間として、欧米を中心に定着してきた教育的概念だ。イギリスのUCAS（大学出願機構）によれば、大学入学前にギャップイヤーを取得する若者の数は年々増加し、2019年には5万人を超えた¹。アメリカではハーバード大学をはじめとする名門大学が公式にその活用を推奨し、「大学での学びを充実させる準備期間」として位置づけている²。

日本ではまだ一般的とはいえないが、文部科学省もその意義に注目しており、2016年の資料では、卒業後から進学・就職までのあいだに様々な活動、たとえばボランティア、海外渡航などを経験するギャップイヤー制度の活用が提言されている³。「トビタテ！留学JAPAN」のようなプログラムも、その一環として位置づけられつつある⁴。高校を一年、いや半年でも早く卒業できれば、4月を迎える前に多くの経験が出来ることは間違いない。

仮に、高校卒業に3年かかったとしても、私はこの「ギャップイヤー」の考えに大いに賛成だ。

私の3歳年下の従弟は、高校卒業時に進路に迷い、あえて「間」をつくり、自分自身を形成する旅に出た。彼は中高時代、陸上に情熱を注いできた。高3の大会を最後に引退したが、競技一色だった彼にとって、その後の道筋は見えていなかった。

「海外に行ってみよう」と相談を受け、とりあえず一緒にタイに渡った。10日ほど行動を共にしたが、日本とは別世界のタイで多くの刺激を受けた様子だった。私はその後も旅を続けたが、彼は高校の卒業式のために帰国せざるを得なかった。当時は帰国便を確定するために「リコンファーム」⁵が必要な時代である。私は手を貸さなかった。「ここは自分でやってみよう。卒業式に間に合うためにも、一人で日本に帰るんだよ。」と伝えた。一つ一つが経験だ。

彼はチェンマイの公衆電話から緊張しながら航空会社に電話し、無事に帰国の便を確定させた。

この10日間は、彼にとって大きく人生観を変える経験となったに違いない。帰国後、従弟は「まずはお金を貯める」と言い、北海道の牧場で住み込みのアルバイトを始めた。その後、アメリカの「オペアプログラム」⁶に参加し、ホストファミリーのもとで子どもの世話や家事を手伝いながら英語を身につけ、お小遣いも稼いだ。さらに北京の大学に進学し、やがてアイルランドで芸術を学んだ。現在では名の知れたフォトグラファーとして活躍し、イタリア人の妻を迎え、英語・中国語・イタリア語を自在に操りながら、世界各国から声がかかる存在となっている⁷。もし高校卒業後、日本の「当たり前前の制度」にそのまま乗っていたら、今の彼はなかっただろう。

私はこれまで、高校・大学・大学院と段階的に海外で学ぶ機会に恵まれてきた。高校時代には自分の世界の狭さを知り、大学では多様な価値観に触れ、大学院では学問と実社会の接点から『自分の生き方』に輪郭を与えることができた。さらに、留学だけでなく、国境を越えて多くの土地を歩き、そこで出会った人々との関わりが、私自身の「背骨」を育ててくれたと感じている。

ミャンマーの山村で出会った少年は、早朝から1時間半かけて裸足で学校に通い。「英語を勉強して、都市で働きたい」と語ってくれた。彼には教科書も鉛筆もなかったが、「学ぶ」という行為自体が、未来への希望そのものだった。また、南米ペルーでは、乗り合いバスで知り合った現地の一家に泊めてもらう機会を得た。四人家族で、7歳の女の子が「学校で英語を習っている」と言い、かろうじてだが意思の疎通ができた。その子が通う学校には黒板こそあったが、殺風景で、古い教科書を繰り返し使っていた。それでも、そこには確かに「学び」が息づいていた。

私は結局、この家族に二週間近くお世話になり、大きな荷物を置かせてもらって身軽な状態でマチュピチュやプーノ、チチカカ湖などを巡った。訪れた場所一つひとつが貴重な経験だったが、それ以上に、彼らと一緒に食卓を囲み、生活を共にする時間が、私にとって大きな学びであった。教育とは、学校の教科書や授業だけではなく、人と出会い、日常を共有し、価値を分かち合う中でこそ生まれる。いずれ必ずまた会いに行きたいと思っているのは、その出会いが私の「生きる学び」を形づくったからだ。

今、私は『留学』に加えて『流学（りゅうがく）』という言葉を使っている。生徒たちにもよく話すのだが、残念がらなかなか浸透しない。それでも私のお気に入り造語だ。なぜなら、『留まって学ぶ』

だけでなく、『流れながら学ぶ』ことにも大きな意義があると思うからだ。たとえ目的地のない旅であっても、バックパックを背負い国や文化に触れることは、地図には載らない「学び」をもたらしてくれる。むしろ、予定調和ではない出会いや出来事こそが、人を根底から変える力を持っているのだ。

ペンフォスター高校の制度は、こうした「生きる学び」の時間を手に入れる扉を開いてくれる。受験や就職に直結する知識も大切だが、社会に出る前に、自分自身の「問い」と向き合い、世界の多様性に触れる時間は、将来にわたって自分を支えてくれる内的な軸をつくってくれる。ギャップイヤーとは、単なる「空白」ではない。自分の意思でつくる「学びの間（ま）」なのだ。

日本でも、若者がもつと自由に『間』を持てる社会が広がってほしい。たとえ制度上は『遅れ』と見なされることがあっても、その時間が「焦り」ではなく、「可能性」として語られる未来を、私は心から願っている。

【注】

- 1 UCAS (Universities and Colleges Admissions Service). * Why Take a Gap Year? * UCAS. <https://wwwucas.com/undergraduate/student-life/gap-year/gap-years-ideas-and-things-think-about>
- 2 Harvard College. * Should I Take Time Off? * Office of Undergraduate Education. <https://college.harvard.edu/gap-year>
- 3 文部科学省「高等教育の将来構想に関する資料（平成28年5月）」

https://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/05/30/1396700_0cs.pdf

4 文部科学省「トビタテ！留学 JAPAN」は、官民協働でグローバル人材育成を推進する留学促進キャンペーンである。留学希望者自身が計画を立案し、ボランティア・インターン・探究活動など多様な海外体験を行う仕組みとして、ギャップイヤー的な活用も念頭に置かれている

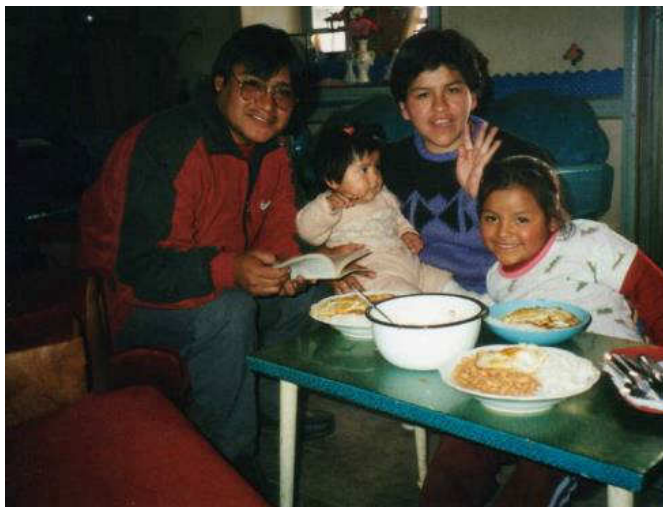
5 リコンファーム (Reconfirm) とは、航空券を予約した乗客が出発の72時間前までに航空会社へ電話などで搭乗意思を再確認する手続きのこと。主に1970～1990年代に国際線を中心に行われており、これを怠ると予約が自動的にキャンセルされる場合もあった。現在はほとんど廃止されている。

6 オペア (au pair) とは、海外の家庭に住み込み、子どもの世話や家事を手伝いながら、その国の言語や文化を学ぶ若者向けの文化交流制度。

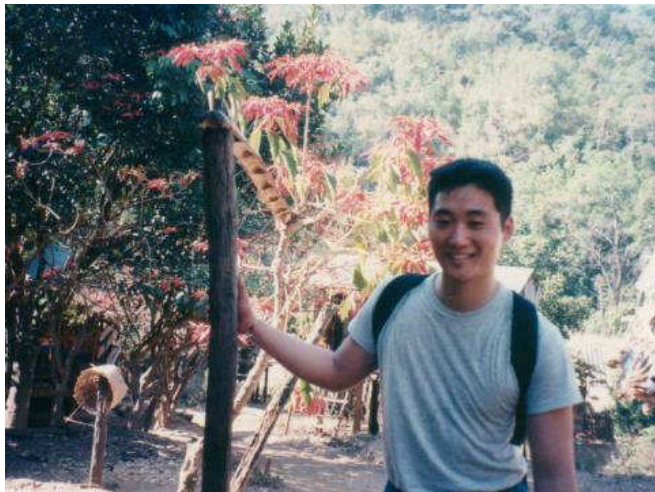
7 神奈川県に生まれた写真家で、2003年にイタリア・ミラノへ移住し、セルジオ・カミナタのもとで見習いを経て、2006年にプロのフォトグラファーとして活動を開始した。現在、国際的に活躍する写真家であり、その活動は公式プロフィールで確認できる。 <https://www.akihirofurya.com/>



ミャンマー奥地の山村 まだ暗闇の早朝
これから学校まで、90分かけて通う



ペルーでお世話になったご家族
辞書を片手に、学びの多い時間であった



若い日の筆者
「流学（りゅうがく）」は宝だ！

お
わ
り
に

舗装されていない道を歩き、電気も水道もない村で、短い鉛筆で必死に学ぶ子どもたちに出会った。その光景に衝撃を受けると同時に、私は「勉強とは、机に向かって点数を取ることはない。学ぶという行為そのものが、人の内側に「生きる力」を育てていくのだ。」と、気づかされた。

私は、いわゆる「学歴」そのものに価値を見出しているわけではない。名門大学の卒業証書や一流企業の名刺は、人生を保証するものではないからだ。むしろ、どんな環境に置かれても、自らの足で立ち、自分の判断で前に進んでいける。そんな強い軸を持つことこそが、本当の意味での「力」だと思う。そして、その軸を内側に育てる営みこそが、教育の本質なのではないだろうか。学歴や偏差値では測れない学びの価値を、私はあの旅の中で見つけた。

私はもともと開発経済学を専門に学んでおり、将来はスイスのジュネーブに本部を置く、国連の国際労働機関（ILO）で働くことを夢見ていた。世界の労働環境や途上国の公害問題を目の当たりにし、国際機関で社会に貢献したいと強く願ったからだ。しかし次第に、そうした問題の根底には「教育」が深く関わっていることに気づき、進むべき道を教育分野へと定めた。

アメリカの大学院を卒業し帰国した私は、国内にも学びの機会を奪われている子どもたちがいる現実に変更して向き合った。そして、人と社会、人と世界をつなぐために、25歳で教育団体を立ち上げた。この国の中にも、「制度の隙間」に取り残されている子どもたちがいる。学校に通えない、学び直したい、けれども制度の条件に合わない。そんな若者たちにとって、選択肢があまりにも限られている現実を前に、「教育とは誰のためにあるのか。」を問い続けた。

ペンフォスター高校との出会いは、その問いに対するひとつの具体的な応答だった。年齢や場所に縛られず、主体的に学びを進めることができる仕組み。高校を卒業するという一点において、これほど多様なルートを認める制度があることに、私は大きな希望を感じた。もちろん、ペンフォスターがすべての人にとって最適な答えとは限らない。だが、「制度の外に、もうひとつの高校がある」という事実は、これまで閉ざされていた扉を開く力を持っている。

教育とは、未来を選び取る力を与えることだ。それは単なる知識の伝達ではなく、「どう生きるか」を自分で考え、決断するための土台をつくる営みである。この本が、「制度の外側」から教育を見つめ直すきっかけとなり、そして、ひとりでも多くの若者の未来に新しい道をひらく手助けとなることを願っている。

令和7年9月1日 岩崎宗仁

【著者プロフィール】

岩崎宗仁（いわさき むねと）

1975年6月、神奈川県相模原市生まれ。

AJインターナショナルアカデミー代表。

学生時代にバックパッカーとして世界30数か国を旅し、貧困や紛争、差別や教育格差の現場を目の当たりにする。そこで「学校とは何か」「教育とは

誰のためにあるのか」という問いを抱き、25歳で教育団体を設立。「人と社会をつなぐ」「人と世界をつなぐ」ことを理念に、以来四半世紀にわたり国際教育に携わる。現在は国際教育コンサルタントとして、高校やフリースクールと連携し、オンライン教育やダブルディプロマ制度を通じて、一人ひとりに合った学びの道を切り拓く活動をしている。若者たちが「自分らしく学び、生きる力を育む」ことを支援するのがライフワーク。

NPO留学協会（理事）、日本学校教育学会、日本通信教育学会に所属している。



テレビ討論で教育を語る筆者
（ベトナム・ハノイ）

監修 手島純（てしま じゅん）

日本通信教育学会理事 星槎大学特任教授

長く通信制高校の研究に携わる。著書に『これが通信制高校だ』『格差社会にゆれる定時制高校』等、編著書に『通信制高校のすべて』等がある。

教育の未来地図 アメリカ通信制高校が示すもの

2025年10月1日 初版発行

岩崎宗仁 著

ISBN：9798267093224

出版社名：Independently published

本書の内容は、著作権法上の保護を受けています。著者の許可なく、転載・複製・配布することを禁じます。

教育の未来地図
～アメリカ通信制高校が示すもの～

お試し版

「はじめに」 「第1章」 「第2章」 「第4章」 「第7章」
「エピローグ」 「おわりに」 を、ご覧いただけます。

ご関心をお寄せいただけたら、
ぜひ本書をお手に取ってお読みください。